

人生ドラマチック

2012・10・4
NHKテレビ 17時から
のタドキネットワーク

作家 宮本 輝 病気との闘い ①

横浜クリニック院長 山田さんの解説から



本名＝宮本正仁。兵庫県神戸市生まれ。昭和22年/1947年3月6日～。芥川賞作家。追手門学院大学文学部卒。幼少時から波瀾万丈な家庭環境を経験。卒業後、サンケイ広告社に勤めるも24歳の時、病気、不安障害・パニック障害発症。25歳の時、創価学会に入信。昭和50年(1975年)、28歳で恐怖が極限状態になり退社。家に引きこもり独学で作家を目指す。作家になった背景・誘引に不安障害・パニック障害があった。同人誌「わが仲間」の池上さんには強く影響を受けた。「説明をするな！ 描写をしなさい！」といわれた。「雨が降ったら、雨が降ってきた……と書く」
病気の時、今井英彦先生に全てを聞いてもらった。先生は「パニック障害という病気は、天才がかかる病気！」といわれ、この言葉に救われた。パニック障害のおかげで、25歳から生死の淵を歩けた。

30歳の時、第13回太宰治賞(昭和52年/1977年)「泥の河」で作家デビュー
第78回芥川賞(昭和52年/1977年下期)「螢川」

医療法人 和楽会 横浜クリニック院長 山田 和夫さんの解説

宮本は昭和22年3月6日、神戸市弓木町に父・宮本熊市、母・雪恵の長男として生まれている。当時、父親は自動車部品を扱う企業の経営者だった。昭和27年大阪中之島に転居、キリスト教系の幼稚園に入園するもシスターに左利きを矯正された際、顔が左に向いたままの状態(頸部ジストニア)を起こしてしまう。救急病院等にかかるも、症状は改善しなかった。ある担当医が「矯正が原因ではないか」と言ったため、退園した所、確かに症状は消え、顔は依然同様前を向けるようになったという。幼少時より、ストレスに対して身体反応をおこし易い子だった。

その後、歓楽街のど真ん中にある大阪市立曾根崎小学校に入学するも、父親の事業の失敗等で一時父親の妹宅に預けられたりする。貧困の渦中の中、父親の女性問題、両親の喧嘩、憎み合い、その結果、母親のアルコール依存症更には自殺未遂と、嵐のような機能不全家族の中で育つ。宮本輝は、当然の如く社会・家族不安に陥り、内にこもりがちになり、社会・家庭内逃避の手段として押入れの中で耳を塞ぐようにして読書を始めるようになる。暗闇の中で読書と物語の世界の中に入り込む事によって、辛い現実から逃避することができた。読書の中に生きる道筋を見出した。この時に読んだ井上靖の『あすなる物語』の感動が、更に読書熱、空想に拍車をかけた。中学、高校時代と押入れの中の読書は続き、山本周五郎『青べか物語』、ファーブル『昆虫記』、コンラッド『青春』等に大きな影響を受ける。大学受験に失敗、浪人生活に入るも中之島図書館に通い詰めるようになり、ロシア文学、フランス文学に熱中する。

追手門学院大学文学部に入学するも、家庭は貧困の中にあり、アルバイトの収入で授業料を支払った。道路工事、バーテン、ウェイター、ホテルのボーイ、中央卸売市場での荷役等、いろいろな仕事に従事した。しかしこれが現実社会の中で蠢く人間観察にも繋がった。

当時父親は事業に失敗し、家には全く帰らず、愛人(35歳)宅に入り浸りであった。程なくして脳梗塞を起こし倒れ、半身不随でありながら暴れ狂い精神病院の閉鎖病棟の中で狂死したという。『血と骨』にあるような、大阪男・父親の壮絶な死であった。父親の残した多大な借金の取り立てから逃げるようにして母親と一緒に転居するも、隠れるような家には寄り付かず、道頓堀界隈をふらつき、酒と博打に明け暮れる日々を送るようになった。やはり、暗く壮絶な学生時代で、絶えず重い疲労感を抱えていたと言う。それでも何とか大学は卒業し、この大学生活が後に『青が散る』という作品になり、切ない道頓堀川での生活が『泥の河』という名品に昇華されていった。『泥の河』は道頓堀川に住む貧しい少年と少女の切ない淡い恋愛感情を、暗く淀んだ川に映し出されるように、日本人の昔からの悲しみ、情愛が表出され、大変に美しい小説となっていて、更に小栗康平監督のもと映画化され、モスクワ映画祭で銀賞を受賞する事になる。日本人のもつ悲哀感が美的に表現され、世界的に多くの人々を感動させた。

この時点ではまだ小説は書き出していない。大学卒業後、サンケイ広告社に入社。コピーライターとして仕事をするようになる。しかし、競馬に熱中し、競馬必勝法なるものを考案、「黄金クラブ」を設立し、危うくサラ金地獄に陥りそうになる。このままいくと父親と同様に破滅的な人生に突き進んで行きそうであったが、これを救うのがパニック障害であった。24歳時、このような危うい社会人生活を送っていた時、電車の中で眩暈と激しい動悸、即ちパニック発作を起こす。「それは突然来ました。電車の中で。休みの日で、友達と京都競馬場に行く約束をしてね。競馬場の電車に乗って、座席に座った。すると何だかボーッと、地面に吸い込まれていくみたいなの、眩暈っていうのかな、何だか嫌な感じになって…。あれ？ 今日、変やな、って思ったんよね。そしたら突然、ドキドキキッと来たんや。それと『俺、死ぬんと違うんかな』っていう物凄い恐怖感が来て、そしたらますます動悸が激しくなった。そんなん生まれて初めてやったし、その恐怖感がずっと取れへんのか、もう競馬なんかする気にもならへん。